



# 変態TSF♥赤セイバー

赤セイバーの体で触手・獣姦・輪姦・異物・拡張・逆レイプ!!



しんぞう

女騎士の城

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

私は魔術師。先日、聖杯戦争という物を知って、その時に召喚されたというセイバーのサーヴァントの事を知り、心を奪われてしまった。あんな美少女を自分の思い通りに動かし、辱め、陵辱できたらどんなに素晴らしい気分持ちの良い事だろうと、毎晩妄想を膨らませた。

そして私は、聖杯戦争と関係なく赤セイバーを呼び出す魔術を研究し、自分の肉体を代償として召喚する事に成功したのだった。

【私】「これが生身の赤セイバーか…やっぱりめっちゃ可愛い…!」

私は、目の巨大な鏡に映し出された自分自身の姿を見て、思わずうっとりしてしまった。



そう、私は自分の肉体を代償に召喚の魔術を使用したため、自分の肉体が赤セイバーの肉体に変化してしまったのだ。本当なら赤セイバーをサーヴァントとして召喚し、令呪で操って犯したかったが、聖杯戦争中ではない以上、それは難しい。

ならば自分自身が赤セイバーの体になってしまえば、どんな事だってやりたい放題できるのではないか、そう考えたのだ。

【私】「ふふふっ……この美しい体が、私の意志で自由に動く……」

本当に……本当に自分の体が赤セイバーになったんだ……」

私は期待に胸を膨らませながら、この美しい体で何をすべきか、妄想を膨らませた。



【私】「…これは自分の体なのだから、遠慮する事は無い。  
新しい自分の体、隅々までじっくり観察しなければ…」

私は、まるで彫刻のように整った  
しなやかな指先を伸ばし、自分の髪、  
頬、唇、胸、おなか、太ももへと触れた。  
さらさらした金髪、張りのある頬、  
ブルブルとした唇、柔らかく大きく張りのある胸、  
引き締まった華奢なお腹、完璧な脚線美を誇る  
すべすべの太もも、どれも非の打ち所の無い肉体だ。

【私】「こ、これが美少女の肉体か…ゴクリ…」

私は、自分自身がこんな美少女になったという事を改めて実感した。



【私】「それじゃあ、次は……」

私は、いよいよ赤セイバーの  
もつとも大事な所、その局部へと  
指を伸ばし、レオタードごと  
その割れ目をなぞっていった。

【私】「ひいつ……」

スベスベのレオタードの上から指でなぞっただけで、

思わず悲鳴のような声が出てしまうほどの感度の良さだ。

赤セイバーの体は興奮のためか、割れ目は少し濡れており、

レオタードの割れ目部分にわずかな染みを作り、指先を湿らせていった。



【私】「う、これはすごいっ……こんなに気持ちいいのっ……」

女の体の気持ちよさは、男の体とは比較にならないと聞いていたが、まさかコレほどまでとは思わなかった。私は肉欲に耐え切れず、レオタードの股間の布地をずらし、割れ目を直接指でなぞり始めた。

【私】「ひぐっ……あっ……ひいっ……」

少しずつあふれ出す愛液を指で掬い取り、割れ目を左右に開きながら、敏感なひだをなぞるようにこすり上げる。気持ちいい。指が止まらない。



私は夢中で指を動かす。ひだをなぞり、クリトリスを指先で転がしていく。

【私】「……あっ……あああっ……！」

自分が本来男である事も忘れ、  
情けないメスの声を溢れさせる。  
そしてクリトリスを強くつまみあげた直後、  
生まれて始めての女の絶頂が訪れた。

【私】「イグッ……！ あああああああっ……！」

強烈な快楽に、頭が真っ白になり、体が跳ね上がり、腰が浮き上がる。

同時に、無意識に我慢していた尿意が我慢できなくなり、

愛液と尿が混ざった液体を床へと撒き散らしながら、私は情けないイキ顔をさらしていた。



【私】「はあ…はあ…」

女の体による絶頂はしばらく続き、私の脳裏に女の快樂の素晴らしさを嫌というほど思い知らせてくれた。そして体が絶頂の余韻から、通常の状態に戻るに従って、再び肉欲がむらむらと湧き出してきた。

【私】「フフツ…流石は赤セイバ―…この肉欲の強さ、

聞いていた通りだな…。これなら色々楽しめそうだ…」

私は絶頂の余韻をじっくりと楽しんだ後、次のプレイのための準備をした。





【私】「ぞ、それでは…次は…」がどうなるか、どうして観察しなうな…」

オナニーの余韻も完全に収まった私は、  
その場にしりもちをついて座り込み、  
両足を手で抱え込んで大きく足を広げ、  
従者が持つ鏡に向けて股間を突き出した。

【私】「んっ…レオタードに張り付いてるっ…」

オナニーによって濡れ、程よく開いた膣口が、  
レオタードに吸い付くように張り付くと、

レオタードの適度な締め付けと肌触りの心地よさを感じる。

濡れてすけたレオタードの向こう側に、ピンク色の花びらのような  
赤セイバーの秘所が鏡に映し出され、丸見えになっている。



【私】「ふふっ…そ、それでは従者よ。余の割れ目を左右に開くがよいっ…」

私は従者に命令した。

一人称が私ではなく、赤セイバー通り余と言ったのは、もっとと赤セイバーになりきって、この体に酔うためだ。

【私】「んっ…あああっ…!」

従者はレオタードをずらし、割れ目を左右へと引っ張った。

セイバーの秘所は柔らかく開き、そのピンクの肉壁を鏡へと映し出した。

【私】「こ、これがセイバーの…」

愛液でぬらぬらと光ったセイバーの花びらはとても綺麗で、私はさらに奥まで観察したくなっていた。

【私】「従者よ、あれをもって余の膣穴を開くがよいっ！」

私がセイバーの体を得たら何をやりたいのか。あらかじめ考え用意していた道具を従者に取りさせた。従者は手に取ったクスコを私の膣口へと近づけ、ローションで濡らしながらゆっくりと埋没させていく。

【私】「うぐっ…あ、圧迫感がっ…ひっ…！」

ギチギチと音を立て、クスコが膣内で広がっていくと同時に、私はその痛みと圧迫感で思わず悲鳴を上げた。

考えてみたら、膣内に挿入した異物はこれが初めてで、しかもこんなに大きく開かれているのだから、無理も無い。しかしセイバーの体は、そのクスコを完全に受け止め、柔らかく開いていった。

【私】「んっ…開いたかっ…では余の中を拝見するとするか…」

従者が完全に開ききった所で、セイバーの内部がどうなっているか観察するために、私は魔術を使い、鏡に映し出された映像を空中に拡大表示させた。

【私】「こ、これがセイバーのっ…」

そこには、愛液でぬらぬら光ったピンクの綺麗な肉壁と、小さく開いた子宮口がはっきりと見えていた。

私が呼吸するたび、肉壁はひくひくと収縮し、クスコを軋ませる。私が鼓動を打ったたびに、そして子宮口はオスを欲しがるように、ほんの小さく開いたり閉じたりを繰り返していた。



【私】「従者よ。余の子宮口をほぐし、広げるがよい」

さらに奥が見たくなつた私は、従者に命令し、

子宮口をその指でほぐすよう命じた。

従者はクスコの中に腕をいれ、指を子宮口にあてがい、ぐりぐりと押し込むように子宮口をこじ開け始めた。

【私】「ひっ……!! くあああつっ……!!」

子宮口は硬く閉ざされており、それを無理やりこじ開けるのは、

膣をクスコで広げる以上の苦痛を伴つたが、繰り返すうちに

子宮口はほぐれ、いつしか痛みも無くなり、ついには指先が子宮口を突破し、

赤セイバーの子宮内部へと入り込んでいった。

これで子宮の内部を見ることが出来る。私は興奮を抑えながら、従者に指示を出した。



【私】「そ、それでは内視鏡を挿入するがよいっ……」

従者はその指をゆっくり引き抜いた後、  
内視鏡を膣内へと挿入していく。

空中に映し出された映像がだんだんと変化していく。  
膣内から、半開きになった子宮口へ、そして  
子宮口を通り抜け、ついには子宮の内部を映し出した。

【私】「こ、これがセイバーの子宮の中っ……!」

粘液にまみれピンク色に光った子宮壁、

その両端にある小さな卵管の穴までが、はっきりと映し出され、  
鼓動と呼吸にあわせていやらしくヒクついていた。

メスの体の本能が、それともオスの本能が、この子宮を精液まみれにしたいという欲求が強くなっていた。



【私】「だめだっ…もう我慢できないっ…」

オナニーによる快樂と、子宮口と子宮の中の映像を見て、興奮に火がついてしまった体を、私は抑える事が出来なくなっていた。私は従者に、服を脱いでその場に横たわり、ペニスを勃起させるよう命じ、従者の目の前で大きく足を開いて股間を見せ付けてやった。

【私】「ふふっ…大きくなってきたな♪」

従者は私が作り出した、自我を持たないホムンクルスである。しかし、そんな従者も、赤セイバーの発するメスの匂いで、みるみるうちにその巨根を勃起させていった。



【私】「んっ……こ、この感触っ……♪」

従者に寝そべるように命令し、その上に座り込むと、勃起したペニスが尻の合間に挟まった状態になった。ピクンピクンと脈打つ硬いペニスの感触が尻に伝わると、女の体だからか、そのペニスの感触に心地よさを感じてしまう。

【私】「我ながら大きいな……これが、こんな華奢な体の……赤セイバーの膣内に入るのかっ……」

こんな美少女がグロテスクなペニスをくわえ込むのだ。私は我慢しきれず、レオタードをずらして腰を浮かせた。





【私】「んぐっ…あああああつっ…！」

私はペニスの上で割れ目を開き、そのままゆっくり腰を沈ませる。  
赤セイバーの割れ目はにちやりと音を立てて開き、  
勃起したグロテスクなペニスをゆっくりと飲み込んで、  
そしてそのペニスにひだを絡ませていった。

【私】「う…な、なんだこの感覚っ…き、気持ちよすぎるっ…！」

女のオナニーも男と比べて数段気持ちよかったが、  
ペニスの挿入がこんなにも気持ちいいとは予想外だった。  
私は無我夢中で腰を押し付け、ペニスをくわえ込んだ。



【私】「んんっ…あああああっっ…♡♡♡」

この従者は、私の精液で作り出したホムンクルスだ。  
つまり、赤セイバーの体を得る前の私と全く同じ体であり、  
私は赤セイバーの体でセックスを楽しむと同時に、  
赤セイバーの体にレイプされている事になるのだ。

【私】「こんな経験、余にしか出来ないだろうなっ♡」

自分自身の筆卸を赤セイバーの体で行っているという事実に、  
私はさらに興奮し、自分自身の精液で赤セイバーの子宮を  
どろどろに汚して満たしてやりたいと思い始めていた。



私がそう思ったからか、子宮口の感触が気持ちよくて最深部ばかり擦り付けていたからか、いつの間にか子宮口が開き始め、ぬるんという感触と同時に、さらに奥、子宮の中にまでペニスが入り込んだ。

【私】「こ、この感触っ…さっきの内視鏡が入った時の…？まさか、子宮にっ…？」

内視鏡ならともかく、ペニスがそんな所まで入るはずがない。私は透視と投影の魔法を使い下腹部を覗き込むと、そこにはペニスをくわえ込んだ子宮がはつきりと映し出された。あの赤セイバーの子宮の中に、ペニスが食い込んでいる。そんな様子を見た私は、さらに子宮をかき回すように腰を動かした。



【私】「従者よっ…もっと余の子宮を激しく突き上げよっ…」

私がそう命令すると、従者は狂ったように腰を突き上げ、私の子宮を押しつぶすように突き上げ刺激しはじめた。

【私】「ひぎっ……!? あひっ……!! あああああっっっっっっ」

あまりに激しいピストンに、子宮は滅茶苦茶にかき回され、子宮口を強引に広げられ、異様なまでの快楽に支配される。私はただのメスとして、そのペニスをぎゅっとかくわえ込み、そして卑猥なあえぎ声を上げ続ける事しか出来なかつた。そして、ついに従者の体に我慢の限界の時がやってきた。





《びゅくっ…びゅくっ…びゅくっ…》

いつまでも止まらない従者の射精と、その都度それを搾り取るように体を痙攣させ締め付ける赤セイバーの体。精液は子宮をあつという間に満たし、卵管にまで染み込んで、膣とペニスの隙間を通って従者の体へとあふれ出していく。

【私】「はあっ…はあっ…♡ す、すこいっ…♡♡」

まだ軽い絶頂の波が私に押し寄せ、終わる事のない快樂が続いている。私は赤セイバーの体を得た事に満足感を覚えつつ、従者のペニスから吐き出される精液を、最後の一滴まで搾り取っていった。



【私】「さて、体力も回復した事だし、次は…」

私は従者のペニスを犯し、赤セイバーである自分の子宮に、大量の自分の精液を注ぎ込ませた。

充分過ぎるほどに気持ちいい行為だったのだが、

絶頂の余韻が収まり体力が回復した私は、

その普通の行為に物足りなさも感じていた。

折角の赤セイバーの体、英霊の強靱な肉体なのだから、

普通の女では出来ない事で陵辱したい。

【私】「となれば、次の相手はやはりこいつだな…」

そう考えた私は、魔界の触手を召喚する準備をした。



私が召喚の魔術を使うと、地面から魔界の触手が滲み出し、たちまち地下室のすべての壁を多い尽くした。

【私】「んっ……この匂いはっ…媚薬か？」

周囲の触手からは、甘い蜜のような媚薬の匂いが立ちこめ、メスの本能を刺激し、子宮がうずき始め、愛液が溢れ出す。流石はあらゆるメスに種付けし、苗床にしてしまう触手だ。しかし、こちらは赤セイバーという英霊の体であり、こんな触手程度に狂わされてしまうほど軟弱ではない。そして私は、震える声で触手へと命令した。

【私】「触手に命令する。余の体を徹底的に犯すが良い」





命令と同時に、触手がじゅるじゅると音を立てて動き出し、私の体にゆっくりと絡みつぎ始めた。触手の体表は媚薬成分のある体液で湿っており、それで軽く肌をこすられるだけで気持ちがいい。

【私】「んっ……ひっ……!？」

触手はヌスを喜ばせるために、的確なポイントを責めてきた。興奮で敏感になっていく乳首を、細い触手の先端でくすぐり、濡れてレオタードに張り付いている割れ目とクリトリスを、太い触手でゴリゴリとこすり上げる。触手は私の体を愛撫し、もう準備が出来ている事を理解し、生殖用の太い触手を割れ目へと近づけた。



《すふうふうふうつつつつ……》

【私】「ひぎっ……!! あがあああつつつつ……!!」

極太の触手が、ミチミチと音を立てて私の膣に入り込んだ。媚薬を纏った触手が膣内にもぐりこむと、無理やり押し広げられている痛みさえ快樂へと変換されていく。その触手が自らをねじるように、長さとかさを変化させ、私の子宮口へと到達すると、今度は子宮口に張り付いて吸盤のように吸い付き、内部の精液を飲み込み始めた。

【私】「よ、余の精液がっ……はがっ……!」

触手は子宮内部のすべての精液を吸い取った後、さらに奥へと進み始めた。



【私】「あひっ……！ やめっ……あああああ……っ……っ……！」

触手は生殖用の物とは別の、極細の触手も私の膣にもぐりこませ、それを子宮口へともぐりこませ、子宮口をこじ開け始めた。媚薬でト回っている私の体は、その触手の動きに抵抗もせず、ただ快楽にビクンビクンと体を跳ね上げさせて、触手のされるがままに子宮口を開かれていく事しか出来ない。

そして、子宮口がある程度開いた所で、触手は太い生殖用の触手を、私の子宮口へとねじ込んできた。

【私】「ひぎっ……！？ あがあああ……っ……っ……っ……！」

子宮を蹂躪される圧迫感と快楽に、私はまるで獣のようなあえぎをもらした。



【私】「あひっ……！ むぐううつつつつ……！」

触手はさらに本数を増やし、私の口にも進入しはじめた。

叫んで舌を噛み切らないようにするためなのか、

体液を流し込んで快楽を増幅し、確実に種付けするためか、

触手は私の口をふさいだ上で、激しく子宮を突き上げ始めた。

【私】「むぐっ……んぐっ……！ んんんんつつつつ……！」

それは子宮を自分の苗床として丁度いい形に整形する動きで、

まるで女性の快楽など考えていない動きなのだが、

そんな乱暴な動きでさえ、媚薬の効果で快楽に変換される。

そして触手は射精が近くなったからか、その動きを止め、

触手の根元に精液の塊と思われるコブを作り、

それを私の膈へと近づけてきた。



その精液で出来たコブは、膣を押し広げながら子宮へと接近する。その圧迫感に、私は無意識に抵抗して膣をぎゅうと締め付ける。その瞬間……。

《びゅるっ！ー！ びゅるるるるるっっっ！ー！》

【私】 「んぐゅ……！？ んむうううううううううう……！」

大量の精液が二気に子宮の中へとあふれ出した。私が締め付けていたおかげで、その勢いはより強烈になり、子宮をパンパンに押し広げ、そして膣の隙間から勢い良く触手の精液があふれ出した。私はただただ、苗床にされる快楽に身をゆだね、何度も絶頂しながら、触手が満足するのを待つ事しかできなかった。



何分なのか、何時間なのか、分からないくらい長い間、触手は私の子宮にどろどろの精液を吐き出し続けた。そして、やっとすべての精液を吐き出し終えた触手は、もう私の体には用が無いとばかりに、生殖用の触手を引き抜いた。

【私】「げほっ……ぐっ……あっ……」

触手が引き抜かれて、少し落ち着いたからか、子宮の中で粘りつく精液の感触がはつきりと伝わってきた。私の元の肉体が吐き出した精液よりも濃く、量が多く、生臭く、メスを孕ませようとする暴力的な意図のある精液。精液が子宮を満たしているだけでも十分に気持ちがいい。そんな精液の重みを感じつつ、私は触手が魔界に帰るまでの間、絶頂の余韻を楽しんでいた。



【私】「さて…落ち着いた所で後始末をしなければ」

私は触手の粘液でドロドロになった服を脱ぎ、レオタード1枚という姿になった。粘液で透けたレオタード姿のセイバーは全裸の方がマシといういやらしさだ。しかし、その姿に見入っている暇は無い。急いで子宮の精液を取り出さなければ、触手が育ち腹を食い破られてしまう。流石に英霊の肉体とは言え、それをやられては死んでしまう。私は従者に命じて、クスコを用意させ、子宮内部の掃除に取り掛かった。



【私】「んっ…あっ…♡」

従者は私のレオタードをずらし、手際よくクスコをねじ込み、開いていった。触手に犯された事で柔軟になった膣穴は難なく開くが、締りが緩んだわけではない。子宮口もびっちらりと閉じているが、開こうと思えばいつでも開けそうだ。流石は赤セイバーの肉体だ。

【私】「よし、では従者よ。中の精液を吸い出して保管するがよい」





私がそう命令すると、従者は巨大な注射器を手に取り、それを小さく開いた子宮口へとあてがった。従者が注射器を引いていくと、ズルズルと音を立て、子宮の精液が吸いだされていく。

【私】「…な、中身が吸い出されるっ!？」

精液はまるでスライムのように子宮に張り付き、吸い出されると子宮壁ごと引っ張られ、落ち着いたばかりの性感帯が再び刺激され、思わず甘い声を我慢しきれなくなる。そんな私の様子を無視するように、従者は遠慮なく精液を吸いだしていった。



【私】「あひっ…あああああっっっ—！」

精液が少なくなるにつれ、子宮が強く引っ張られ、まるで子宮を引きずりだされているような、そんな感触が快楽となって私の体を襲う。しかし、化け物に腹を食い破られないため、全て吸い出すまでは終わる事が出来ない。

【私】「ひぐっ…あああああっっ—！」

二度、三度と繰り返し吸引され、射精とは反対方向の吸い出される快楽に、私は絶頂で体を震わせ、声を漏らした。



【私】「はあっ…はあっ…♡」

何とか吸い出せる分を吸い出した所で、私は従者に命じて、子宮内部にどれだけ精液が残っているか確認させる。

従者が子宮に指を入れ、内部をかき回すと、その指先に粘ついた精液がこびりついた。

【私】「やっぱり残っているか…従者よ、余の子宮の中を綺麗に掃除せよ」

私がそう従者に命令すると、従者はとんでもない物を持ち出してきた。



【私】「ひっ……!? そ、それはっ……!」

従者は掃除用のブラシを持ってきたのだ。確かに、普段から従者に掃除を命じる時は、このブラシを使っているのだから、そのように判断しても仕方が無い。

【私】「こ、こらっ……そんな物でっ……!」

こんな物で子宮をこすり上げられたら、どんな感触なのだろうか。

私がそんな事を考えている隙に、

従者はそのブラシを子宮へと突き刺した。



【私】「あぐっ…ひぎいっつっ…!」

使い古されて柔らかくなっているとは言え、  
ブラシはブラシ。そのジヨリジヨリとした  
先端が子宮口を通り抜け、子宮内部へと  
入り込むと、あまりの刺激の強さに、  
体がひくんと跳ね上がった。

【私】「やめっ…あがあっっ…!」

従者は命令通り、子宮を掃除する。  
ゴシゴシと子宮内部をこすり上げる。  
私はただ悲鳴を上げる事しか出来なかった。



【私】「ひぐっ……あっ……ああああっっっ♡♡」

何度も子宮をこすり上げられ、  
子宮にこびりついた精液をこそぎ落とされた。  
こんなブランでこすり上げられているのに、  
私の体は快樂として受け入れ絶頂した。

【私】「うぐっ……はあっ……はあっ……♡」

そして、やっと子宮内部の清掃が終わり、  
従者がブラシを引き抜くと、子宮内に  
残っていた精液がどろりとあふれ出し、  
地面にポタポタと滴っていった。



【私】「はあ…はあ…」

触手攻めからのブラシ攻めで、  
流石の英霊の肉体でも疲労が出たのか、  
私は壁にもたれてぐったりと座り込んだ。

【私】「流石に今日はもう無理だな…」

今日は一旦休んで明日に備えよう…」

私はシャワーを浴びて、体に付着した粘液を綺麗にした。  
そして明日やりたい事を考え、そしてその準備を従者に命じて、  
私は明日の事を想像し胸を高鳴らせながら眠りについた。



【私】「んっ…長く寝た…」

夢も見ないほどぐっすり熟睡し、  
体力的な疲労は完全に回復した。  
流石は赤セイバーの若くて健康な体だ。

【私】「ふふっ…さて、今日は…」

性欲もすっかり回復したようで、自分の体を  
鏡で見ているとムラムラしてオナニーしたくなるが、  
今日はやりたい事があるので、それは我慢し、  
従者に着替えを取らせた。





私は従者に用意させた制服に身を包んでいった。  
紺のハイツックス、赤の手エックスカード、紺のベスト、そして赤いリボン。  
一式に身を包んだ後、私は恐る恐る鏡を見た。

【私】「似合いすぎだろう、これは！」

赤セイバーなら絶対に似合うだろうと思い、  
用意しておいた女子学生風の制服だが、似合う所かそこら辺の女子学生の数倍可愛い。  
アイドルとして売り出しても問題の無いレベルの可愛らしさだ。

【私】「こんな女子学生が街を歩いたら、一体どうなるか楽しみだ……♡」

私は街で大勢の人に見られる事を想像し、興奮しながら玄関のドアをくぐった。



私が繁華街に出ると、通りすがりの男達が二斉にこちらを振り返り、その目を奪われていた。

【通行人】「…あんな金髪の女子学生、この辺りにいたっけ？」

【通行人】「うおっ…滅茶苦茶可愛いな…留学生かな？」

【通行人】「いや、アイドルじゃねえの？ カメラどこだ？」

【私】「ふふっ…見てる見てる♡」

周囲の男達は私を見ながら、遠巻きに噂話をしている。

赤セイバーの肉体は耳も目も良いので、その様子が手に取るようにわかる。

男達の視線は、私の顔、胸、そして見にスカートから露出した太ももに注がれる。

ねっとりとした視線は、まるで昨日の触手のように絡みつき、

触れられてもいけないのに愛撫されているような気持ちよさで、私の股間は次第に濡れはじめた。



私そのまま歩いていくと、私を注目していた暇な男達は、遠巻きに私の後をそるそるとつけてくる。私はそんな男達を横目に、歩道橋の階段を登った時、男達からざわめきが聞こえてきた。

【男】「お、おいっ……!? 見たか今の……? パンツが見えなかったぞ!!」

【男】「マジだ……!」綺麗なお尻がバツチリ写ってる……!」

【男】「あの子ノーパンだぞっ……!」



ノーパンで出歩いているのが、大勢の男達にバレてしまった。

私とその興奮を抑えながら歩いていると、男達は欲望をむき出しのままに相談を行い、早足で私に接近して取り囲み、ニヤニヤしながら話しかけてきた。

【男】「ねえねえ、お嬢さん。パンツ忘れてるよ?」

【男】「それともわざとはいてないのかな?」

【男】「ねえどっちななの? お兄さん達に教えてくれないかな?」

男は私を追い詰めるように、欲望に目を血走らせながら問い詰めてくる。周囲を取り囲む男達は、平日の昼間からやる事も無くブラブラしているような男達だ。赤セイバーという、ローマ帝国の皇帝という過去を持つ、高貴で可愛い女の子が、そんな暇な男の性欲の対象になっている事に興奮を覚えた私は、さらに男達を挑発してやろうと考えた。

【私】「余のパンツか？ 忘れたのではなく、最初からはいてないぞ。」

余の体に隠すような醜い所はどこにも無いからな」

【男】「おおおお……!? マジで!?!」

【男】「こんな可愛い美少女女子学生がノーパンで露出狂だなんて!」

【男】「それに自分の事を余って、やっぱ外国の子なのかな、回調が可愛いね!」

【男】「隠すような醜い所が無いなら、見せてもいいんだよね? 見せて見せて!」



【私】「こんな所で見せると言うのか？ まったく、どうしようもない変態共だな♥」

男達はカメラやスマホを手に持って、いつでも撮影できる準備をしている。こんな男達に見られると思うと、興奮して指先が震えてくるが、私はあくまで平静を装い、スカートの上端をつまみあげて、ゆっくりとスカートをめくり上げた。



【男】「うおっ…おおおおおー!!!」

【男】「ほ、ホントに見せてくれたっ…! ノーパンだ…!」

【男】「すっげえ、割れ目ばっちり見えてるっ…! しかもバイパンじゃん!」

【男】「写真撮っていい? 撮っていいよなっ…!」

男達は私の割れ目を食い入るように見られて、私は下腹部のうずきを我慢しきれなくなっていた。

そしてついに、我慢していた愛液が割れ目から溢れ出し、太ももを伝い落ちた。

【男】「えっ？ 濡れてる？ 見られて興奮しちゃった？」

【男】「やっぱり露出狂の変態じゃないか……ウヒヒッ！」

【男】「そんなに興奮してるなら、俺達で満足させてやるうか？ へへっ……！」

【私】「ふふっ……そうか♡」

ちゃんと余を満足させられるなら、相手をしてやっても良いぞ♡♡」

私も興奮が高まり、見られているだけでは物足りなさを感じはじめていた。

臍をこすり上げる肉棒の感触と、子宮口をこじ開け子宮内部に入り込む亀頭の感触、

そして、子宮内に吐き出され卵管に染み込んでいく精液の感触が、欲しくて我慢できなくなっていた。

私は大喜びする男達を引き連れて、近くの公衆トイレへと移動した。



【男】「へへっ！ラブホではなく、こんな所でやるうって言うの？」

【私】「ホテルまで移動するのも面倒だろう？ さっさと済ませたいからな♡」

【男】「やっべえ、こんな汚いトイレにこんな美少女、逆に興奮してきたわ」

【私】「ふふっ♡ お前達の相手はここで充分だ。」

ほら、裸でそこに寝そべるが良い♡」



男は私の命令どおり、素直に服を脱いでその場に寝転がった。

でっふりと太った醜い体に、私の元の体と同じかそれ以上のペニスが露になる。

しかもこんな平日からブラブラしているような男だ、るくに金も無く、るくに風呂に入っていないのが、

男の汗臭い匂いが酷い上に、ペニスにはびっしりとチンカスが付着している。

とても相手に選べないような不潔さだが、その不潔さと悪臭が、逆に赤セイバーの体を興奮させた。

私は興奮する心を抑え、男の上にまたがって、ゆっくりと腰を沈めていった。

【私】「んんっ……♡ ああああああっっっ……♡♡♡」  
【男】「うおっ……! この締め付けっ……!?!」

私は男のペニスをゆっくりと飲み込んでいく。  
膣壁でチンカスがこそぎ落とされ、ざらざらした感触が伝わってくる。  
あんな汚い、どこの誰かわからないペニスに、赤セイバーが犯されていると思うと、興奮で腰が止まらなくなってしまう。

【男】「うっ……! こ、コンドームつけてないけどいいの?」  
【私】「貴様達相手にゴムなんて上等な物は必要ない♡  
たっぷりと生で搾り取ってやるから覚悟せよっ♡」





【男】「ご、こんな美少女と生セックススツツ……！ やべえう……！ 我慢できねえう……！」

【私】「精液もチンカスも全て余の子宮にささげるが良い♡ あああう♡♡♡♡」

男はあまりの快楽が、ペニスをビクビクさせながら必死に射精を我慢している。

射精してしまっても構わないのだが、少しでも長く私の中を楽しむために耐えているのだろう。

私としても、簡単に射精されては面白くない。少しでも粘ってもらわなければ。

私は、深部まで挿入した所で動きを緩め、ペニスの先端を子宮口にごすりつける動きに変える。

男はとりあえず絶頂は免れたものの、私の膣の具合の良さに、顔を歪ませている。

【男】「す、すげえう……こんな名器初めてだう……！」

【私】「ふふう、そうであるう♡♡ たっぷり楽しんで、子宮に精液を吐き出すがよいぞう♡♡♡♡」



私が男のペニスをぐりぐりと子宮口にこすりつけていると、

昨日触手やプランで散々開発された子宮口が開き始め、男の先端をくわえ込み始めた。

【男】「うおっ……!? な、なんだこの感触……? さらに奥に突き刺さっていく……!」

【私】「ふふっ……♡ 余くらいの名器ともなれば、子宮口を開いて、

その奥を使わせるなど、造作も無い事なのだ♡♡♡」

【男】「う、うそだろっ……!? 子宮に入ってるのかっ!?!」

「こんな美少女の子宮に、俺のチンポとチンカスがっ……!」

男は興奮を我慢しきれないようで、絶頂しそうなのも忘れ、私を孕ませようと激しく腰を突き上げ始めた。

【男】「が、我慢できねえっ……!」





【男】「あっ……あああっ……」

私が従者を犯した時には使わなかったのだが、サーヴァントの肉体は性行為を通して、人間の生命力や魔力を吸い取り、その肉体の維持に使う事ができるようになっている。私は、男から精液を搾り取ると同時に、その生命力と魔力を気絶するまで搾り取った。

【私】「ごちそうさまっ♡ 中々よかったぞ♡」

【男】「気絶するほど気持ちいいなんてっ……！ 次は俺だっ！」

【私】「全員の相手をしてやるから、順番に並んで待て♡」

【男】「は、早く犯してくれえっっっ！」

そして次の男が服を脱いで、その場に寝転がった。



【私】「ふふっ…それじゃあたっぶり搾り取ってやるからな♡♡♡♡」  
【男】「お、お願いしますっ…!! あああああっっ!!」

男達は交代で服を脱ぎ、私に犯され、そして精液と魔力と生命力を吐き出していった。昨日とは違い、射精されればされるほど、イケばイクほど力が漲ってくる。男達はそうとも知らずに、精液もチンカスも全て搾り取られて気絶していった。

【男】「ほらほら、こっちに向かって笑顔でピースして〜」

【私】「んっ? ほら、これで良いか?」

私は男達を犯しながら、待っている男達にサーブिसするため、その妖艶な姿を撮影させてやった。



【男】「うおっ…だ、だめだっ…もう…う…」

それから数時間後。十名を超える男達全員から精液を搾り取ってやった。男達は全員気絶して、薄汚いトイレの床や個室で転がっている。

【私】「ふう…♡ 触手の快樂には及ばないが、見知らぬ男達を次々に犯して、その精液を搾り取っていくのは、中々楽しかったな♡♡」

私はその場に膝をついで、子宮に入った精液があふれ出さないように、生理用タンポンを取り出して、膣奥へと挿入した。子宮の中でタポタポとゆれる精液の重さに心地よさを感じながら、私は汚れた体を軽くぬぐって、男子トイレを後にした。



男達から精液を搾り取って満足した私は、一旦自分の家へと帰宅した。集めた精液について、家の地下にある私の魔術工房で調べたかったからだ。

【私】「なるほど…興奮が高い状態で射精された精液ほど、高い魔力と生命力を有するようになるのか」



集めた精液は、赤セイバーという英霊の肉体を維持する他にも、その魔力と生命力を取り出して、あらゆる魔術に使用することができる。男の体だった頃は、魔力の確保に苦労したものだ、この体ではその苦労とは無縁で、しかも魔力集めに快樂まで伴うというのだから、笑いが止まらない。私は魔力集めのため、そして自らの肉欲を満たして快樂に浸るために、どうやって街の男達を興奮させ、そして自分に精液を貢がせるか考える事にした。

【私】「よし、準備は出来たな」

その日の夜。

私はバニーガールの衣装に身を包み、  
撮影機材と放送用のパソコンをセットした。

興奮した男達の精液を集めるには、  
私の事を宣伝する必要があると考えたからだ。

【私】「昼間の二件がネットで広まっているようだから、

生放送をすれば大勢の男達を釣ることが出来るだろう…

…フフツ、楽しみだ♪」

そして私は、従者にカメラを向けさせ、生放送をスタートした。





放送を開始すると、視聴者数が増えていき、画面がどんどんコメントで埋め尽くされていく。

【視聴者】

「バニーちゃん、めっちゃ可愛いぞ」

【視聴者】

「この子…例の女子学生じゃない？」

【視聴者】

「本当だ！ すげえ本人じゃん！」

【視聴者】

「公衆トイレのセックス写真見たよ〜」

「コメントは私に対する卑猥な期待であふれかえる。昼間よりはるかに多い男達に見られている事実に興奮した私は、」

さらに男達を煽るために言葉をつむいでいく。

【私】「ラフツ…余がその女子学生だ。 貴様らのような変態な男達に、」

これから余のエッチな姿を存分に見せてやるから、楽しみにしてろがオシロイ」



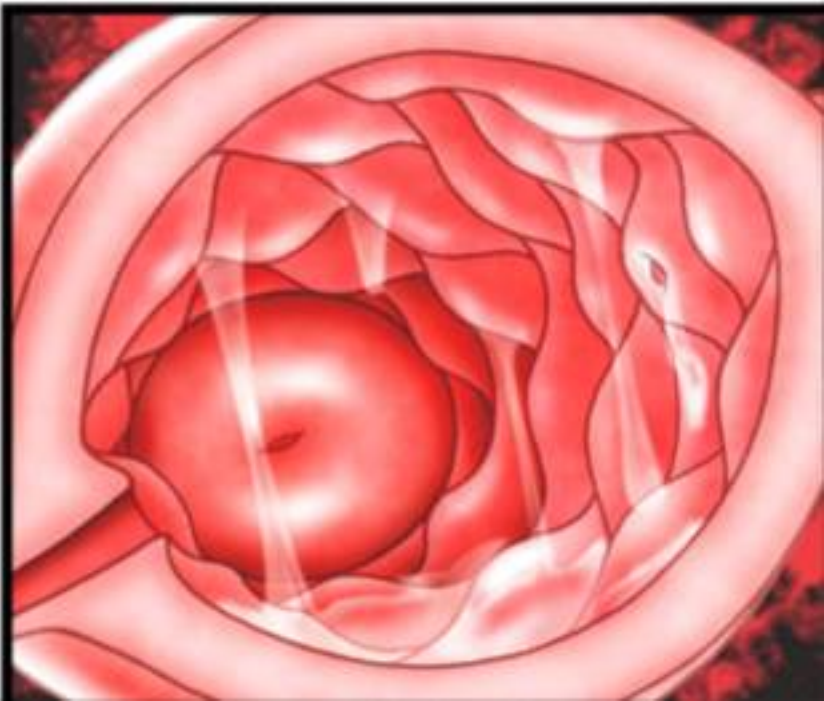
【私】「では、余の美しい体、じっくり見るが良い♡」

私は早速両足を大きく広げ、  
バニーガールの股間部分をすらし、  
網タイツに穴を開け、性器を露出させた。

【視聴者】「おおお！ マジでやった！」  
【視聴者】「生放送でマンコさらしてる！」  
【視聴者】「おい、これ大丈夫かよ！」  
【視聴者】「こんなの永久保存版だろ」

視聴者は次々に興奮のコメントを投げかけてくる。  
しかし、こんなものはまだまだ序の回だ。

私はさらに男達を煽るべく、事前に考えておいたプレイをするため、従者に命令を下した。

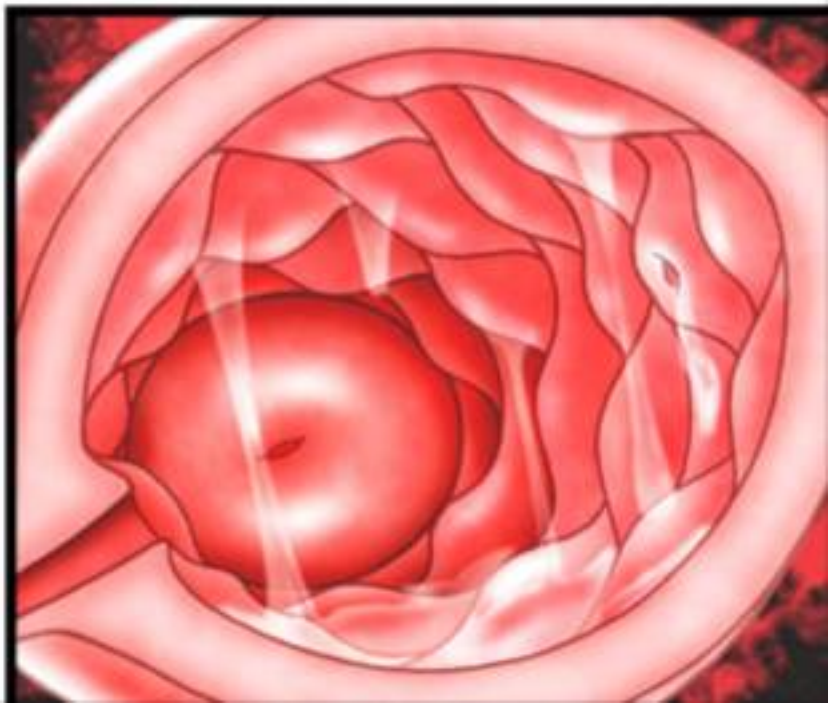


【私】「んっ…もっとう奥まで  
開いてやるからな♡  
ちやんと見るんだぞ♡」

従者は私に近づき、クスコを膣穴に挿入し、  
そのまま遠慮なく開いていった。

【視聴者】「おいおい、露出狂にも程があるだろ」  
【視聴者】「すげえ、子宮丸見え…」  
【視聴者】「膣壁もヌルヌルでエロすぎ」  
【視聴者】「うわ、あの中で射精してえ…」

男達の視線とコメントが、私の子宮口に対して集まってくるのが分かる。  
この中に射精したいという欲望が、画面を通して魔力として伝わるかのようだ。  
しかしこの程度では終わらない。私はさらに奥を見せ付けるため、従者に命令した。



【私】「ラフツ…この変態共め♡  
もっと見せてやるから、  
期待するがよいぞ♡」

私がそう言った後、従者は命令どおりに私の子宮口に指を入れ、子宮口を広げ始めた。

【視聴者】「えっ…そんな所に指が入るのか!?!」  
【視聴者】「おいおい、マジかよ!?!」  
【視聴者】「美少女なのに変態すぎだろ!?!」  
【視聴者】「子宮の中に射精してえ!?!」

男達は私の行為に驚きと興奮を隠しきれないとばかりにコメントした。子宮口をいじられる感触、それを見られている感覚が、とても心地よい。もっと奥まで見られたい。もっと変態と呼ばれたい。私はさらにハードなフレイを命令した。



私はさらにハードなフレイを命令した。

【私】「ゆ、指では我慢できん！  
拳で余を犯してくれっ♡」

従者は膣穴からクヌコを引き抜き、  
半開きになった膣穴に拳を近づけ、  
ねじ込むように拳を埋没させてきた。

【私】「ひぐっ……!? あああああっっ！」

【視聴者】「お、おい、腕が入ったぞ！」


【視聴者】「ファイトファック!?!」

【視聴者】「あんな太い物が入るなんてっ！」

【視聴者】「まさか子宮にも入ってるんじゃないっ！」

従者の腕は膣穴を限界まで広げ、その拳は子宮内部に食い込んでいる。  
気持ちいい。もっと激しく犯されている所を見られたい。私はその一心で従者に命令を下した。





【私】「じ、従者に命じるっ…  
余の子宮内部を激しく  
突き上げるのだっ…♡」

命令の直後、従者はまるで腹の内側を  
殴りつけるような勢いで、拳を突き上げた。

【私】「おっっ…！ ひぎいっっっ…！」  
【視聴者】「うわっ！ すげえピストン！」  
【視聴者】「あんなに激しくて…すげえ」  
【視聴者】「お、おい、これ大丈夫か!？」

本当なら痛いはずの、拳による子宮内部からの突き上げ。

しかし丈夫で完璧な英霊の体と、大勢の人に変態行為を見られているという興奮からか、  
痛みすら快楽になっているような、そんな背徳的な気持ちよさに、私は愛液を飛び散らせながら絶頂した。



【私】「あがっ…ひぐっ…♡」

それから十分ほど。

従者は私の子宮をかき回し続け、  
ゆっくりとその拳を引き抜いた。

その間、私は何回も絶頂し、そして激しい動きに  
子宮口も膣も開いたままの状態になっていた。

【視聴者】「すげえ、子宮の中丸見え…」

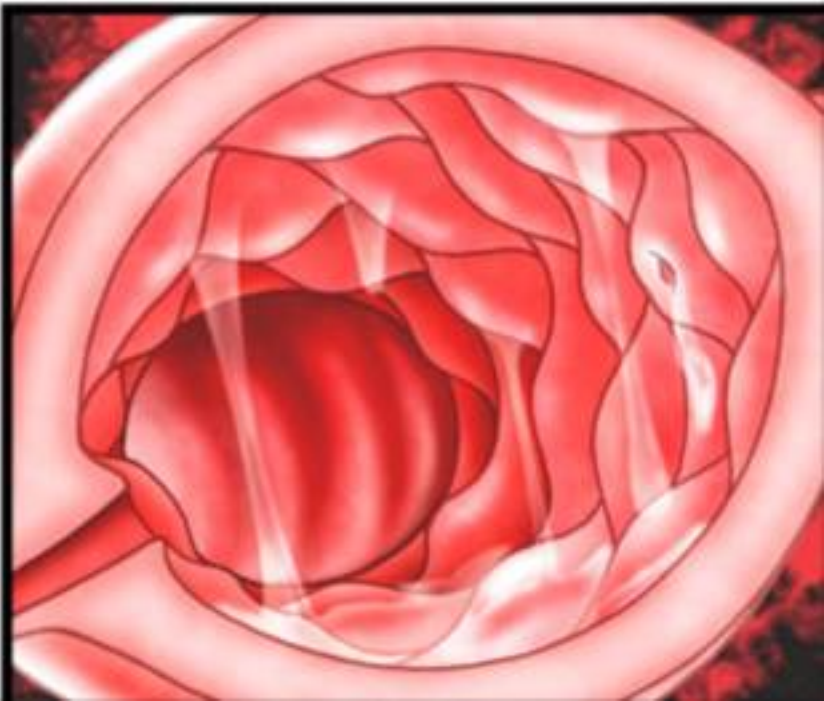
【視聴者】「膣も子宮口もヒクヒクして…」

【視聴者】「本気汁でべとべとになってる…」

あまりに倒錯的な変態プレイの生放送にも関わらず、男達は私の行為に釘付けになった。

ここまでのプレイを見せ付けられでは、彼らはもう私以外の女を想像する事はできないだろう。

あとは彼らの精液を搾り取るのみだ。私は満足げな笑顔を浮かべ、変態生放送を終了した。



翌日。私は薄手の競泳水着に身を包んで外出した。肌寒さも感じるが、そこは英霊の体、この程度ではびくともしない。インナーの無いハイレグの競泳水着は、尻の割れ目に食い込み、体にびつちりと張り付き、股間の割れ目とピンク色の乳首をうっすらと浮き上がらせている。

【私】「ふふっ…今日は何人くるだろうか…」

昨晚、フィストファックし、子宮の中まで生放送した直後、

私は乱交の誘いを掲示板に書き込んでから就寝した。

その様子は生放送すると言ったので、顔がバレて困る男は参加しないだろうが、それでもこの私と、赤セイバーとセックスしたいという男は少なくないだろう。

私は期待に胸を膨らませ、通りすがりの人の驚くような視線を心地よく感じながら、私と従者は指定した廃墟へと向かった。





廃墟に到着すると、数十名の男達が待ち構えていた。

【男】「おっ…セイバーちゃん、本当に来たぞっ!」

【男】「うわっ…生で見るとめちゃうくちゃ可愛いなあっ…」

【男】「すげえ、ハイレグの競泳水着、良く見ると透けてるじゃん!」

【男】「今日はたっぷり中出しさせてもらおうからね」



男達は私を見るなり、じろじろと顔、胸、股間に視線を注いだ。

昨日は画面越しとはいえ、彼らに子宮の中まで見られていたのだと思うと興奮する。

そして彼らの精液が私の子宮の中へ注ぎ込まれると思うと、我慢できなくなってしまう。

【私】「ふふう…それでは順番を決めるがよい。たっぷり余の中に射精してもらおうかな」

そして二人目の男が私に近寄り、興奮でガチガチになったペニスを露出させた。

【男】「へへっ…俺が二番乗りだぜ、セイバーちゃん」

【私】「ふふっ…中々立派なペニスだなぁ」

男は私に黒光りするペニスを見せ付けた。  
ペニスからは薄汚れたオスの匂いが立ちこめ、  
それが私のメスの体をより興奮させる。

【私】「ほら、いつまでそうやって突っ立っておるか。」

早く余にそれを挿入し、子宮に精液を吐き出すがよい♡」

【男】「わかってるよ、たっぷり犯して種付けしてやるからなっ！」

そして男はペニスを割れ目に近づけ、水着の股間をずらし、その巨根を割れ目へとつきたてた。

【私】「んんっ…♡♡♡ ああああああうっっっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

男のペニスが容赦なく私の膣穴に突き刺さる。

さまざまに変態行為で開発された子宮口は、

私の意思で自由に開き、そのペニスを最深部までくねえ込む。

男の巨大なペニスは一気に根元まで入り込み、子宮口で締め付けられ、引き抜こうとすると子宮ごと外に持っていかれそうになる。

【私】「ふふっ…♡♡♡ よいぞっ♡♡♡ もっと激しく突き上げ引き抜くがよいっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

【男】「な、なんだこの名器っ…奥で子宮口に締め付けられてっ…!!」

あまりの快樂のためか、男は苦悶の声をあげ、脂汗をダラダラと滴らせながら、盛りのついた獣のように、ただ腰を動かす事しか出来ずにいた。





【私】「ふう、堪能した♡ 次は誰だ？ 早くこちらへ来るが良いっ♡♡♡」  
【男】「よ、よしっ……！ 次は俺だっ……！」

次は筋骨隆々とした男だ。ペニスもそれなりにたくましい。

私は男を床に寝そべらせ、その上に馬乗りになってペニスをくわえ込んだ。

【男】「ふおおっ！？ な、なんだこの締め付けっ……！ が、我慢できねえっ……！」

【私】「そんななりで早漏か？ まったくな避けない奴だな♡♡」

私になじってやると、ペニスは嬉しそうに子宮内部で跳ね上がる。

男は我慢しきれないとばかりに腰を突き上げ、

そしてあっという間に射精した。





それから数時間。

私は男達を次々に犯し、精液を搾り取り、魔力と生命力を搾り取っていった。生命力を吸い取られた男達は次々に倒れていくが、逆に私の体は生命力にあふれ男達を犯せば犯すほど元気になり、性欲も強くなっていく。

【私】「ふふっ……いよいよ貴様が最後だな♡」

遠慮なく余の中に射精するがよいつ♡♡」

【男】「は、はいっ……」

そしてついに、「一番最後の男からの精液を搾り取った。」

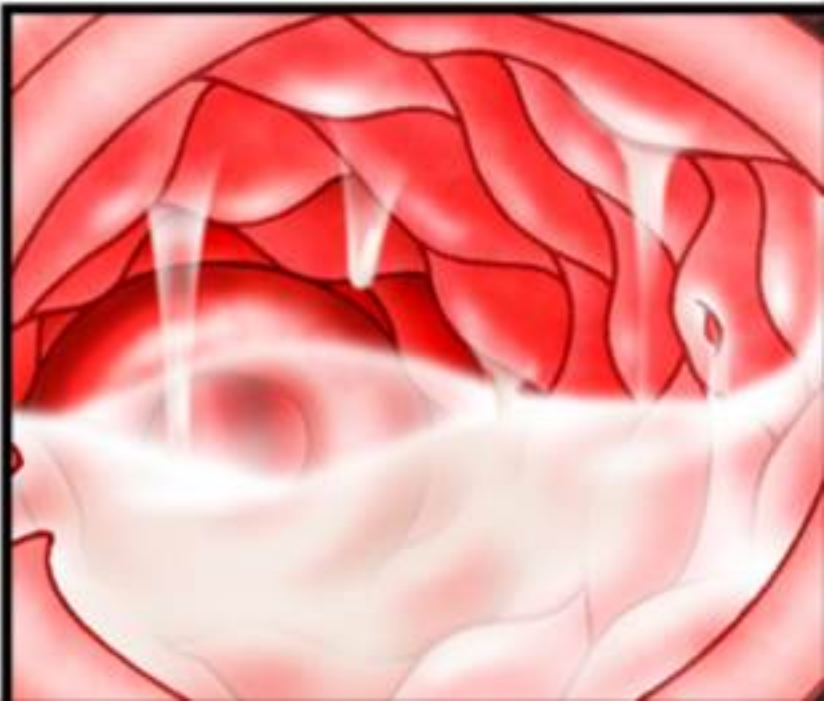
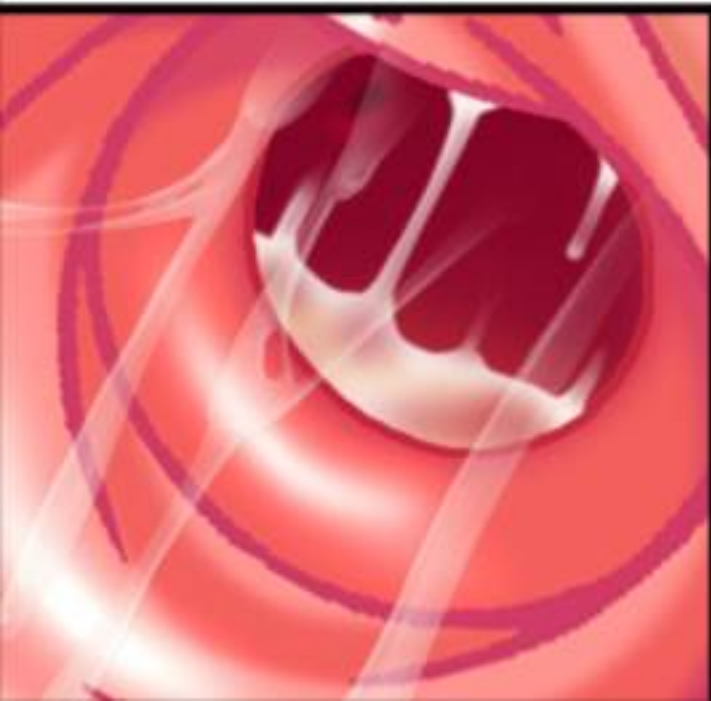


【私】「ふう…♡  
満足したっ♡♡」

気絶した男達を尻目に、私は  
子宮の中に吐き出された精液を見る。  
もうクスコを使うまでも無く、自分の意思で  
膣穴と子宮口が開くようになっていた。

【私】「ふふっ♡ 精液でいっぱいだ♡」

精液の多くは、赤セイバーの肉体が  
生命力として吸い取ってしまったが、  
それでも結構な量の精液が残っていた。  
私はそんな精液まみれの子宮の様子に満足し、その様子もきっちりど  
ネットに流した上で、満足して生放送を終了した。





一通りあらゆる快楽を味わった私は、もう元の体に戻る気は無くなっていた。こんなに若くて美しく、そして気持ちのいい体を得たのだ。私は魔術師としてではなく、赤セイバーとして生きる事を選んだ。

【私】「では今日の配信を開始する。じっくり見るのだぞ」

【視聴者】「待ってました！」

【視聴者】「今日はどんな相手とやるの？」

私がネット配信しているチャンネルは、色々な衣装とマニアックなプレイ、何より赤セイバーという美少女の無修正動画という事で、大人気になった。今日は魔界から召喚した化け物と交尾する動画を放送する。

私はその化け物に魅了の魔法をかけると、化け物は腐ったペニスを勃起させ襲い掛かってきた。



【私】「んっ…♡  
あああああっ♡♡♡」

全身が薄黒く汚れた化け物が、  
そのグロテスクで生臭い生殖器を  
私のピンク色の割れ目を無理やり押し広げ、  
一気に子宮の中に入れて入り込んでくる。  
めめった垢にまみれたペニスは心地よく、  
私は無意識に膣と子宮口を締め付け、  
化け物の子種を子宮に搾り取るうとする。

【視聴者】「今日のセイバーちゃんのお相手は…なんだあれ…？」

【視聴者】「特殊メイクか？ コスプレか？ 本当に化け物みたいに見えるな…！」

【視聴者】「セイバーちゃんのような美少女が、あんなわけわかんない奴にレイプされて…！」

【視聴者】「うっわ、セイバーちゃんめっちゃ気持ちよさそうww マジ変態だよこの子www」



【私】「んっ…♡  
あああああっ♡♡♡」

全身が薄黒く汚れた化け物が、  
そのグロテスクで生臭い生殖器を  
私のピンク色の割れ目を無理やり押し広げ、  
一気に子宮の中に入れて入り込んでくる。  
めめった垢にまみれたペニスは心地よく、  
私は無意識に膣と子宮口を締め付け、  
化け物の子種を子宮に搾り取るうとする。

【視聴者】「今日のセイバーちゃんのお相手は…なんだあれ…？」

【視聴者】「特殊メイクか？ コスプレか？ 本当に化け物みたいに見えるな…！」

【視聴者】「セイバーちゃんのような美少女が、あんなわけわかんない奴にレイプされて…！」

【視聴者】「うっわ、セイバーちゃんめっちゃ気持ちよさそうww マジ変態だよこの子www」



視聴者の期待が高まり、  
閲覧数とコメント数が  
見る見る膨れ上がっていく。

【私】「ほらほらっ♡」

早く中に出すが良い♡」

【花け物】「ウゴアアアツツ！」

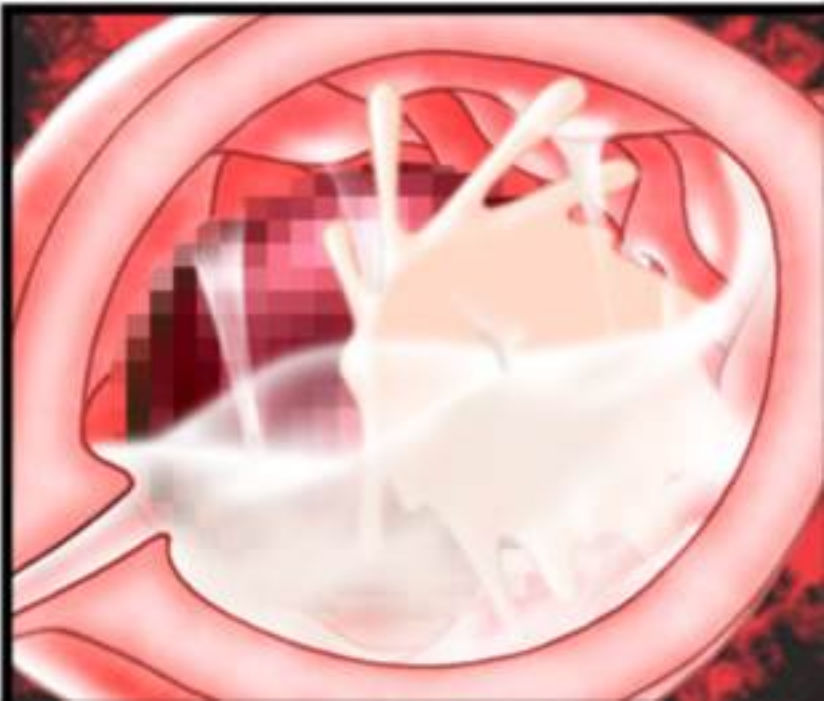
《ひゅるるるっ！　どひゅるるるるっ！！》

私は興奮で暴れる化け物を締め付け逃がさないようにすると、

化け物は絶頂を我慢しきれずに、特濃の精液を吐き出し、

めめった垢ごと子宮に大量の精液を流し込んできた。

私は「いや、余は、こんな化け物を犯している所を見られ、絶頂の快楽に打ち震えていた。



終わる

～ あとがき ～

このたびは本作品をご購入頂きまして、  
誠にありがとうございました。

本作品はC91新刊同人誌の内容を、  
修正・加筆したものとなります。  
作中のイラストおよび文章は  
女騎士の城のナイトが作成しております。

背景等はフリー素材を使用しております。



～ あとがき ～

本作品のイラスト及び文章の著作権は、  
二次創作として作者にありますので、  
無断での販売・転載は禁止いたします。

違法アップロードサイトなどで、  
無断転載を見かけた方は、  
女騎士の城までご連絡お願いいたします。



～ あとがき ～

以下は女騎士の城WEBサイト、メールアドレスです。  
ご意見ご要望やその他ご連絡はこちらまでお願いいたします。  
<http://knightmaster.kir.jp/>  
[general@kagoya.net](mailto:general@kagoya.net)

この度は本当にありがとうございました！  
これからもどうぞよろしくお祈いします。

女騎士の城

